

# アンゲリア



「アンゲリア」はギリシャ語で「ニュース・伝言・メッセージ」という意味です。



## 授業訪問シリーズ No.10

### 授業科目名：「英語A2《L1E9》」

授業担当教員：異徹（教育学部）

英語A2は、学部学科等による指定クラスで必修科目ですが、担当教員の様々な工夫で初年次英語教育の柱として「語彙力・構文力を伸長させる」ことを目指す科目です。

異先生のシラバスでは、「授業のねらい」欄に次のように記載されています。

「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」それぞれの技能を高めるとともに、「聞いたり、話したり」「読んだり、話したり」するなど、複数の技能を組み合わせたタスクを行う。最終的には、四技能を用いた総合活動を通して、実践的コミュニケーション力を身に付けることをねらいとする。

さて、実は英語が「苦手」な私は、どのように講義が行われていくのか、興味をもって授業訪問しました。今回の訪問は、後学期14回目の講義であり、授業は全て英語で進められていました。

まず、バラク・オバマ米新大統領の就任演説画像を使ってプロジェクトで見聞させながら、カードを配り、書かれた英単語のトピックをキーワードにして3人のグループで数分間フリートーキングをさせ、その間は各グループの話聞いて回り、アドバイスなどをしていました。（その間も先生のiPodとスピーカーからは、英語のBGMが流れていました。）

その後、カードの裏の「日替わりトピック」で異先生のこのクラスについて、感想等をグループの内から1人ずつ英語で発表をさせました。（当然、絶讃ばかり?）

続いてGroup Work Reportingでは、4・5人のグループを作り、各グループから代表を1人ずつ出して、教室の外で待つ異先生の所でパソコンを見ながら、先生があるストーリー（今回は古いオリンピックが題材）を英語で説明し、話しを聞き取らせ、各自が部屋に戻ると話の内容を英語でグループメンバーに伝えました。残りのメンバーは、それを聞いてメモを取り、ストーリーを英語で書いて再現する事を繰り返しました。そして、最終レポーターが英語で要約を書き、他のメンバーも要約をレポート提出しました。

ここでは、英語でアウトプットする動機として、「グループメンバーに伝えなくちゃ!」「英語で要約を書かなくちゃ!」「要約を提出しなくちゃ!」とみんな一生懸命でした。「インプット」重視の英語授業から「アウトプット」重視の英語授業へ様々な工夫をされ、飽きさせない講義で、文字通り言語内容を「出力」させ、音声や文字などを通して、各自から情報を発信させていました。

異先生の授業を訪問し、今後の英語教育について考える場合、一つのキーコンセプトとして挙げられるのは、「話す」を中心としたアウトプット型の学習活動であろうと思えました。なお、この点については、異先生が昨年末のFD研究会で話されたことと重なりました。

全学共通教育事務室 正村 隆弘

## 英語の講義について、異先生が熱い思いを語りました。

今回の「授業訪問」で授業の様子をレポートしていただき、日ごろの授業を客観的に見つめる良い機会となりました。レポートの通り、授業は次のような骨組で構成されています。

- ① 英語のテレビ番組を見る
- ② 英語によるフリートーキング
- ③ Group Work Reportingの活動
- ④ 授業全体が英語で進められる

では、私の「熱い思い」を語る前に、今年を受講生の皆さんの受講終了後のアンケートを基に受講生の「熱い思い」はたまた「熱い不満や批判?」をそれぞれの授業場面別にまとめてみることにします。

- ① 英語のテレビ番組を見る

今回の授業ではオバマ米新大統領の就任スピーチを見ましたが、いつもは、主にイギリスのテレビ番組(例:「クイズ\$ミリオネア」など)を視聴していました。受講者アンケートによると92%の人が「お勧め」の活動だと言っています。

### 受講者アンケートのコメント

- ・海外のクイズ番組を見て答えを考えてみるというのは面白かったし、何といても生の英語に触れているという感じですごくワクワクしました。
- ・外国のテレビ番組を見る機会は日常生活の中ではそんなにありません。この授業はそれができる唯一の貴重な時間です。
- ・クイズ\$ミリオネアは、クイズの内容が難しかったけど楽しかったです。教材用のビデオじゃなくて本当に放送されているものを見て、話すスピードと発音が知れて勉強になりました。
- ・イギリスのCMIにき付けになった。



・高校の授業ではやることのなかったspeakingを取り入れた内容の授業があってとても自分のためになったと思いました。また、グループや、English Partyでは、いろいろな人とコミュニケーションをすることができて、とても面白かった。

・この授業の最初の頃に比べて、今の方が英語を話したり読んだりできるようになったと思います。毎時間、カードを使って会話する活動があり、頭の中で英文を組み立てるのに少しは慣れることができました。

・カードを使っている人々と英語で話したり、一つのテーマについてみんなで英語討論をしたり、自分の言いたいことを英語で伝えるのは本当に難しいことだと思いました。

初めのうちは2分間会話を続けることすら大変な様子でしたが、そのうち3分でも5分でも英語で会話を継続できるようになってきました。講義の最中にはご遠慮願いたい「おしゃべり」「雑談」ですが、英語の学習場面としては大歓迎でした。

### ③ Group Work Reportingの活動

授業レポートの中でも詳しく紹介いただいた通り、4技能を総合的に用いて学習してもらうのが、Group Work Reportingの活動です。「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれの力を総動員して頑張ってもらいました。

・‘Group Work Reporting’という活動は難しいものでしたが、集中して英語を聞けば案外理解できるものだなと、少しばかり感動しました。グループ内で協力しながらやっていくのは楽しかったです。

・‘Group Work Reporting’は、グループで力を合わせて文を作るというのがとても楽しかったです。英語を聞いて、英語で理解して、英語で話すということは、常に頭を働かせていたので、とても勉強になりました。最初は大変そうな授業だなと思い不安だったけど、だんだんこの授業が楽しみになっていました。

・英語で話さなければならない状況に追い詰められるのはつらいけど、なんとか頭をしぼって、単語をひねり出せました。普段の生活で英語を考えることが全くなかったので疲れましたが、訓練されている感じがしました。

## 多様な個性との出会い

教育学部(特別聴講生) 中国・電子科技大学交換留学生 魯貝

今年の4月から、日本で一年間の留学生活が始まった。最初の頃、日本の大学について何も知らなかったのも、どんな授業をとったらいいか悩んだ。一年間しかないのも、できるだけ悔いを残さずに興味がある授業を多くとって、充実した生活を送りたいと思った。

そのとき、ある留学生の先輩が全学共通教育のカリキュラムを渡して、こう言った。「全学共通教育には留学生向けの日本語の授業もあるし、ほかに面白い授業も沢山ある。気に入ったら、とってみない?」先輩の言葉をきっかけに、多様な個性との出会いも始まった。昨年の前学期、「異文化論Ⅰ—異文化として見た日本の生活文化Ⅰ—(日本事情CⅠ)」、「日本語DⅡ—論文の書き方—」、「英語」、「韓国語」のあわせて四つの全学共通教育の授業をとった。

「異文化論Ⅰ」というのは、留学生センターの森田先生が担当で、日本人の学生と留学生と一緒に受ける授業である。授業中、先生が日本の伝統行事などを紹介して、それからグループに分かれ、各自の国の習慣や風俗を自由に話し合うのが主な授業の流れだった。森田先生が紹介した日本の伝統行事などは、外国人の私たちにとって不思議なものが多かった。地方によりいろいろと違いもあるので、日本人の学生も楽しそうだった。グループで討論するのは一番楽しみなことだった。なぜかという、毎回違う人とコミュニケーションができるからだ。同じ日本人であっても、人によって日本の伝統行事を観察する視点が違うので、多様な観点が得られる。まして日本人、中国人、韓国人、マレーシア人、ベトナム人などが集まれば、みんなそれぞれの文化で育ててきており、考え方も人生経験も大きく相違している。多様な個性がここで出会い、夏の花火のように輝いていた。この授業を通して、日本文化、日本語の勉強、異文化との交流、また人とのコミュニケーションなどができた。これは一石二鳥ではなく、一石四鳥だった。

ほかの授業も非常に楽しい雰囲気で行われた。どんな授業であっても、ひとつの共通点があると思う。それは、自由な学術的雰囲気である。教室は、授業を一方的なものに終わらせない意見交換の場である。学生が誰でも気軽に自分の意見が述べられる。もともと、正解というものがないと存在しているとは限らない。人により、見る視点や角度も違い、同じものに対する感想やイメージはそれぞれなのだ。個性が十分にのびられるからこそ、学生一人一人の旺盛な学びの意欲が全面的に湧いてくるのだろう。

学部の枠組みを越え、充実した環境で、多様な個性と出会えたことが、私が全学共通教育の授業に魅かれた理由だと思っている。全学共通教育は、自ら学ぶことができ、多様な個性と出会うことができる。「面白い」だけでは終わらない授業をとってみたいかどうか。

言いたいことがあるのに英語で言うことができないとか、前に勉強した表現なのに、いざ使おうとすると出てこない。こんな状況に追い込まれるとなおさら、「英語でどんな言い方をするのか?」とグループメンバーや授業者の発する英語に注意を向けることになるのですね。そして、「それそれ!それが知りたかった!」「その表現は、そんな風に使えばいいんだ!」と、知りたかったに会い、それを使ってみるたびに、少しずつ皆さんの英語の力が進歩してきたのではないのでしょうか。ちなみに、この活動は81%の人が「お勧め」活動に選んでいます。

### ④ 授業全体が英語で進められる

・先生が授業を英語で進めていたことに最初は戸惑いましたが、後になって考えれば、いい意味で強制的に英語に触れさせられていたことは、とても力になることだと思いました。

・月曜1限からとてもハードでした。英語はPE(体育科)だと思いました。

・月曜1限から英語で授業が進められたのはきつかったのですが、聞き取ろうとする力が付いたと思います。

・こんなアクティブな英語の授業は初めてだったし、授業もずっと英語だから最初は戸惑ったけど、こんな授業形態は大学らしくて自由で良いと思った。毎回新鮮だった。

「いい意味で強制的に(?)英語に触れる!」「英語はPEだ!(つまり、英語は実技教科だ!)と言いたいのかな?」など数々の名言(?)をいただき、授業者としてもとてもいい勉強になりました。皆さんの「熱い思い」に圧倒されて、私の「熱い思い」の出番がなくなってしまいましたが、それは追々、授業の中で「英語」で語っていくことにしましょう。



## 編集後記

授業訪問シリーズは、No.10をお届けします。教育学部の異先生が教養教育で行っている英語授業の事例紹介です。近年の大学での英語教育はすいぶん変化しました。読解力だけでなく聴解力を高めるための訓練、発音や音読の練習といった皆さんの積極的な学習参加が求められています。異先生の授業は、先生自身の御専門(英語教育)の知見も踏まえ、そのような積極的な(active)な学習のあり方の最先端に行くものです。

もう一つの記事は、中国からの留学生の「生の」声です。教養教育の本質の一つは、専門教育では得られない学問的知見を学習・獲得するところにあります。つまり、教養教育と専門教育は「相補的」関係にあります。今回の記事では、大学という自由闊達な学問の場で、「役に立つ」スキルの学習だけでなく、異質な世界や他者を理解し、人間として知的に精神的に成長することの大切さが含意されていました。

編集責任:教養教育推進センター副センター長 中川 一雄